

短 報

自然体験活動を基軸とする幼児教育の現状とその展望 —森のようちえん全国調査の結果から—

菊田 文夫¹⁾ 藁谷 久雄²⁾ 田中 誉人³⁾ 伊藤めぐみ⁴⁾

Current Situation and Overview of Early Childhood Education Based on Experiencing Nature —Results of a National Survey on Forest Kindergartens in Japan—

Fumio KIKUTA, PhD¹⁾ Hisao WARAGAI²⁾
Takahito TANAKA³⁾ Megumi ITO⁴⁾

〔Abstract〕

The aims of this study were firstly to examine the current situation and issues surrounding activities carried out in forest kindergartens operating throughout Japan, and secondly to put forward suggestions for establishing forest kindergartens as a new method of early childhood education.

The following concepts of activities were summarized from responses obtained from 156 forest kindergartens in Japan : providing a better environment for children ; bringing up children while adults themselves grow ; supporting children's natural potential to develop themselves ; pursuing activities based on experience in nature ; having adults watch over children's growth ; and encouraging children's vigor toward life. The results also suggested the following future measures : spreading the ideas of forest kindergarten as organized activities ; having adults play their own roles to help children through forest kindergartens ; improving the quality of forest kindergartens ; implementing activities in forest kindergartens according to the needs of each facility ; promoting the activities of forest kindergartens ; and providing all children with opportunities to experience forest kindergarten activities.

〔Key Words〕 forest kindergartens, nature experience activities, early childhood education, childcare, fact finding survey

〔要 旨〕

本研究の目的は、全国に展開されている「森のようちえん」活動の現状と課題について把握し、森のようちえんを新たな幼児教育の方法論として確立するための提言を行うことにある。

全国の森のようちえん156施設から得られた回答によると、その活動コンセプトとして、「子どもがおかれている環境を整える」「大人が育ち合う中で子どもを育てる」「子どもが自ら育つ力を信じて支援する」「自然との関わりに価値をおいた活動を進める」「子どもの成長を大人みんなで見まもる」「子どもの生きる力を育む」があげられた。さらに、今後、「森のようちえんの理念を組織的な活動として拡げる」「子どものために、森のようちえんを通して、大人が果たすべき役割を担う」「森のようちえんの質を高める」「そ

-
- 1) 聖路加国際大学看護学部 基盤領域 St. Luke's International University, Social Sciences & Humanities / Fundamentals of Research
 - 2) 森のようちえん全国ネットワーク Forest Kindergarten Network
 - 3) 公益財団法人日本アウトワード・バウンド協会／尼崎市立美方高原自然の家 Outward Bound Japan / Amagasaki-shiritsu Mikata-kougen shizennoie
 - 4) NPO 法人国際自然大学校 National Outfitters Training School

受付 2015年10月28日 受理 2015年10月30日

それぞれのニーズに合った森のようちえんを実践する」「森のようちえんの活動をアピールする」「すべての子どもに森のようちえんを体験できる機会を提供する」といった方策が求められていることがわかった。

【キーワード】 森のようちえん, 自然体験活動, 幼児教育, 保育, 実態調査

I. はじめに

豊かな自然のもとで幼児教育や保育を実践する「森のようちえん」は、1970年代初頭に始まった、ヨーロッパを起源とする取り組みである。これまでに設立されている各国の森のようちえんには、園舎を持たず、一日の多くを森の中で過ごす保育を行っているものが多くみられる。300を超える森のようちえんの活動が実践されているドイツでは、Miklitz¹⁾が、その理念として、自然界の四季の移り変わりを体験する、自然の中で自己の身体の限界と可能性を体験する、子どものファンタジーが自由に発揮される、お互いが助け合うというありかたを基礎にして、グループの社会的態度と個を強化する、などをあげている。このように、ドイツの森のようちえんでは、環境教育の先進国として、先駆的な教育の蓄積が、その教育に盛り込まれ、オルタナティブな教育のひとつとして根付いている²⁾。

一方、わが国の森のようちえんについては、森のようちえん全国ネットワークが、「自然体験活動を基軸にした子育て、保育、乳児・幼少期教育の総称」と、その活動を定義している。また、その理念として、①自然はともだち（自然の中で、子ども、親、保育者が、共に育ちあうこと。自然の営みに合わせるとのこと。保育や福祉の仕組みを理解し、日本の保育や子育て全体に貢献すること。）、②いっぱい遊ぶ（自然の中で、仲間と遊び、心と体のバランスのとれた発達を促す。）、③自然を感じる（自然の中でたくさんの不思議と出会い、豊かな感性を育む。）、④自分で考える（子どもの力を信じ、子ども自身で考え行動できる雰囲気をつくる。）を掲げている³⁾。

わが国の幼児教育に、海外で生まれた森のようちえんの概念を定着させていくためには、他国と日本の風土や文化などの相違²⁾を顧みるべきであろう。そのためには、現在実践されている森のようちえん活動の現状と改善を要する点について把握するとともに、それらを解決するための方策を導き出す必要がある。

II. 研究目的

本研究では、森のようちえん全国ネットワークが、森のようちえんの活動を取り入れている施設を対象として実施した、全国実態調査の資料から、以下の3点を明ら

かにする。さらに、これらの結果に基づいて、森のようちえんの現状と、改善を要する点について整理し、わが国の風土や文化に根差した森のようちえんを確立させていくための提言を行う。

- 1) 森のようちえんの活動において大切にしている概念は何か。
- 2) 大切にしている概念が類似する施設群それぞれに、どのような特徴があるのか。
- 3) それぞれの施設群が、森のようちえんの活動を通して、地域社会とどのようなつながりを有しているのか、今後、地域社会とどのようなつながりが必要と考えているのか、さらに、森のようちえんが今後どうあるべきと考えているのか。

III. 研究方法

1. 研究対象

本研究は、全国で森のようちえんの活動を取り入れている施設のうち、質問紙調査への協力が得られた156施設を対象とするものであり、個人を対象とするものではない。

2. 分析方法

研究目的の1)および3)については、テキストマイニングツール、KH Coder⁴⁾を用いて、文章を単位とする計量テキスト分析を行った。その際、日本語特有の表現によって、誤分類された文章については、それが意味する内容を吟味し、適切なカテゴリーに再分類する操作を行った。

研究目的の2)については、計量テキスト分析によって抽出された、森のようちえんの活動において大切にしている概念、それぞれを含むか否かに注目して、156施設を類似した特徴を有するグループに分類した。

研究目的の3)については、前述の概念が類似する施設群ごとに、地域社会とどのようなつながりを有しているのか、今後、地域社会とどのようなつながりが必要と考えているのか、さらに、森のようちえんが今後どうあるべきと考えているのか、という3つの視点から、その特徴を明らかにした。

以上の結果を俯瞰することにより、森のようちえんの現状と、わが国の風土や文化に根差した森のようちえん

を確立させていくための提言をまとめた。

IV. 研究結果

1. 研究対象施設の概要について

施設の形態については、「自然学校」が最も多く60施設(38.5%),次いで「認可外保育」と「自主保育(保護者主導型)」がともに28施設(17.9%),「青少年教育施設」が23施設(14.7%)であった。一方,既存の「保育所」と「幼稚園」は,それぞれ17施設(10.9%),14施設(9.0%)であった。その活動内容については,自然体験活動が223件と最も多く,次いで,季節生活体験活動が96件,農業体験活動が69件みられる。

森のようちえんとしての年間活動日数は,「30日未満」が64施設(41.0%)と最も多く,次いで「通年実施」が37施設(23.7%)みられる。施設に所属している子どもの人数については,「6~10名」が34施設(21.8%)と最も多く,次いで「21~30名」が27施設(17.3%),「51名以上」が24施設(15.4%)であった。

2. 森のようちえんの活動において,大切にしている概念

「森のようちえんとしての活動で最も大切にしている考えかた」に回答のあった文章253について計量テキスト分析を行った結果,抽出された概念と,その根拠となった文章数は,「子どもが自ら育つ力を信じて支援する」が69,「子どもがおかれている環境を整える」が28,「自然との関わりに価値をおいた活動を進める」が52,「子どもの生きる力を育む」が51,「子どもの成長を大人みんなで見まもる」が33,「大人が育ち合う中で子どもを育てる」が20であった。

3. 大切にしている概念が類似する施設のグループ化

前述の2.で抽出した6つの概念を含むか否かに注目して,156施設を分類した結果,以下の7群に分類できた。

A群「自然と関わりながら,子どもが自ら育つ力を信じて,子どもの成長を大人みんなで見まもる」施設(19施設/12.2%)

B群「自然と関わりながら,子どもが自ら育つ力を信じて,大人が子どもとともに育ち合い,生きる力を育む」施設(22施設/14.1%)

C群「子どもがおかれている環境を整え,自然との関わりに価値をおいた活動を進める」施設(17施設/11.0%)

D群「子どもがおかれている環境を整え,子どもが自ら育つ力を信じて,自然との関わりに価値をおいた活動を進める」施設(23施設/14.7%)

E群「子どもがおかれている環境を整え,自然と関わ

りながら,子どもが自ら育つ力を信じて,生きる力を育む」施設(39施設/25.0%)

F群「自然との関わりに価値をおいた活動を進める」施設(11施設/7.1%)

G群「子どもが自ら育つ力を信じて支援する」施設(25施設/16.0%)

4. 地域社会とのつながりの現状

「森のようちえんの活動が地域社会とどのようなつながりを持っているのか」に回答のあった文章167について計量テキスト分析を行った結果,抽出されたつながりの現状と,その根拠となった文章の数は,「地域の人びとからの支援を受けている」が60,「環境や人的資源を活かした交流の実践」が41,「他の組織やキーパーソンとの関係づくり」が32,「子育て支援の役割を担っている」が21,「森のようちえんが地域を変えている」が13であった。

5. 地域社会とのつながりに関する今後の課題

「今後,地域社会とどのようなつながりが必要と考えているのか」について回答のあった文章87について同様の分析を行った結果,抽出された今後の課題と,その根拠となった文章の数は,「地域に暮らす多世代の人びとと交流したい」が28,「子育て支援のためのネットワークをつくりたい」が22,「森のようちえんをもっと理解して欲しい」が20,「地域に根ざした森のようちえんをつくりたい」が17であった。

6. 森のようちえんが今後どうあるべきと考えているのか

「森のようちえんが今後どうあるべきと考えているのか」への回答に含まれていた文章194について同様の分析を行った結果,抽出された今後のあるべき姿勢と,その根拠となった文章の数は,「森のようちえんの理念を組織的な活動として拡げる」が53,「それぞれのニーズに合った森のようちえんを実践する」が47,「子どものために,森のようちえんを通して,大人が果たすべき役割を果たす」が40,「森のようちえんの活動をアピールする」が20,「すべての子どもに森のようちえんを体験できる機会を提供する」が18,「森のようちえんの質を高める」が16であった。

7. 大切にしている概念が類似する施設群それぞれの特徴について

森のようちえんの活動において大切にしている概念が類似している施設群と,前述の4.,5.,6.との関係について検討した。これによると,A群では,地域環境や人的資源を活かした交流(57.9%)の実践や,地域の人びとからの支援(31.6%)を受け一方,地域に暮らす

表1 森のようちえんが今後どうあるべきと考えているのか（施設群別）

施設群（含まれる施設数）	理念を組織的な活動として拡げる	大人が果たすべき役割を果たす	質を高める	それぞれのニーズに合った実践をする	活動をアピールする	すべての子どもに森のようちえんを体験できる機会を提供する
A (19)	36.8	10.5	5.3	26.3	10.5	15.8
B (22)	31.8	36.4	4.5	18.2	4.5	4.5
C (17)	35.3	35.3	17.6	17.6	11.8	5.9
D (23)	26.1	13.0	8.7	26.1	8.7	4.3
E (39)	43.6	12.8	7.7	17.9	7.7	10.3
F (11)	45.5	0.0	9.1	36.4	18.2	0.0
G (25)	24.0	12.0	4.0	20.0	4.0	4.0

セルの数値は、それぞれの施設群に含まれる施設数に占める割合（%）を表す。

多世代との交流（26.3%）や、地域に根ざした森のようちえんづくり（52.6%）を、今後の課題としている。さらに、それぞれのニーズに合った森のようちえんを実践すべきである、と回答している施設が26.3%みられた。

B群では、A群と同様に、地域環境や人的資源を活かした交流（50.0%）の実践や、地域の人びとからの支援（36.4%）を受けていることがわかった。また、森のようちえんへの理解を望む（22.7%）とともに、地域に根ざした森のようちえんづくり（27.3%）を今後の課題としている。さらに、今後は、子どものために、森のようちえんを通して、大人が果たすべき役割を果たす、と回答している施設が36.4%みられた。

C群では、他の組織やキーパーソンとの関係づくりが41.2%の施設で取り組まれており、子育て支援の役割（29.4%）や、地域環境や人的資源を活かした交流を実践している（35.3%）ことがわかった。さらに、今後は、森のようちえんの質を高めるべきである、と回答している施設が17.6%、子どものために、森のようちえんを通して、大人が果たすべき役割を果たす、と回答している施設が35.3%みられた。

D群には、子育て支援の役割を担っている施設（30.4%）、地域の人びとからの支援を受けている施設（26.1%）、他の組織やキーパーソンとの関係づくり（30.4%）、あるいは、地域環境や人的資源を活かした交流（26.1%）を実践している施設が含まれている。一方、地域に暮らす多世代との交流（21.7%）、子育て支援のためのネットワークづくり（27.1%）を今後の課題としていることがわかった。さらに、それぞれのニーズに合った森のようちえんを実践すべきである、と回答している施設が26.1%みられた。

E群には、地域の人びとからの支援（30.8%）を受けている施設や、他の組織やキーパーソンとの関係づくり（25.6%）、地域環境や人的資源を活かした交流（23.1%）を実践している施設が含まれている。さらに、すべての子どもに森のようちえんを体験できる機会を提供すべきである、と回答している施設が10.3%みられた。

F群には、他の組織やキーパーソンとの関係づくり

（27.3%）を実践している施設が含まれている。また、森のようちえんへの理解を望む（18.2%）とともに、子育て支援のためのネットワークづくり（18.2%）を今後の課題としている。さらに、これからの森のようちえんの活動においては、それぞれのニーズに合った森のようちえんを実践すべきである（36.4%）、森のようちえんの活動をアピールするべきである（18.2%）と回答している施設がみられた。

G群には、地域環境や人的資源を活かした交流（44.0%）を実践し、地域の人びとからの支援（24.0%）を受けている施設が含まれている。また、地域に暮らす多世代との交流、を今後の課題としている施設が20.0%みられた。

なお、地域社会とのつながりの現状として、森のようちえんが地域を変えている、と回答している施設は、A群、C群、F群以外の施設群に、ほぼ同程度含まれていることがわかった。また、表1に示す通り、どの施設群についても、今後、その理念を組織的な活動として拡げるべきである、と考えている施設の割合が高かった。

V. 考察

子どもが自ら育つ力を信じること、子どもの成長を大人みんなで見まもること、大人が育ち合う中で子どもを育てること、を大切な概念として活動している施設は、地域環境、人的資源を活かした交流や、地域の人びとからの支援が不可欠である。そこで、これに該当する施設の多くが、自らにとって必要とされる、地域とのつながりを獲得していると考えられる。一方、子どもがおかれている環境を整えることを大切な概念として活動している施設では、そのために必要な、他の組織やキーパーソンとの関係づくり、環境や人的資源を活かした交流を実践している。さらに、このつながりを活かして、地域における子育て支援の役割を担っていると考えられる。

地域とのつながりに関する今後の課題についてみると、子どもの成長を大人みんなで見まもる概念を持って活動している施設の多くが、地域に根ざした森のようちえんづくりを望んでおり、そのために、地域に暮らす多世代

の人びととの交流を求めていると考えられる。また、大人が子どもとともに育ち合う概念による活動から、森のようちえんについてもっと理解してほしいとの願いと、地域に根ざした森のようちえんづくりへの希望が生まれていると考えられる。さらに、自然との関わりに価値をおいた活動を通して、子育て支援のためのネットワークづくりを目指しているといえる。

一方、森のようちえんの将来に向けて、その理念を、組織的な活動として広げるべきであると考えている施設がとて多いことがわかった。子どもの成長を大人みんなで見まもること、子どもがおかれている環境を整えることを大切な概念として活動している施設では、子どものために、森のようちえんを通して、大人が果たすべき役割を果たす必要性を感じている。また、自然との関わりに価値をおいた活動を進める施設では、それぞれのニーズに合った森のようちえんを実践すること、森のようちえんの活動をアピールすることが必要であると感じていることがわかった。参加者の希望に沿った、魅力的な自然体験活動を実践し、そこで感じる感動や楽しさ、達成感などを通して、広く幼児教育への貢献を望んでいると考えられる。さらに、子どもの成長をみんなで見まもり、生きる力を育む、森のようちえんを、すべての子どもに届けたいという想いが推察される。

森のようちえんの活動では、偶発的な状況の連続によって、遊びが生み出され、子ども同士が相互に働きかける機会が多くみられる。また、子ども同士の会話がプロジェクト型で協同的な活動を生み出すという大きな特徴を有している⁵⁾。ペーター・ヘフナーは、ドイツの森のようちえん出身の子どもについて、特に授業中の協働において優れ、動機づけ・忍耐・集中、および社交的行動において、正規の幼稚園出身の子どもよりも高い評価を得たと報告している⁶⁾。子どもに与えられる許容範囲が、さまざまな面において減少し、子どもが自発的な行動を通して成長する過程が省略される傾向にある⁷⁾。現代において、森のようちえんが果たすべき役割は大きいものと考えられる。

このように、森のようちえんは、自然との交流や、多世代との交流を通して、地域を変え、地方を変え、そして日本を変える、計り知れない可能性を秘めている。将来の地球を担う、すべての子どもたちに、いのちを尊ぶ心や、世界平和の礎を築く、教育実践活動であるといえよう。

VI. 提言

森のようちえん全国実態調査の分析結果に基づいて、以下の6点を提言する。

1. 地域に根ざした森のようちえん活動は、親子のみ

ならず、地域に暮らす多世代の人びとが、日常生活を営む中で交流できる貴重な場を提供できる可能性をはらんでいる。この特徴を最大限活かして、行政とも連携しながら、地域を変える、地域の顔となれる、森のようちえんを目指す。

2. 地域に暮らす高齢者に、森のようちえんを支援してもらい仕組みをつくりあげる。これによって、高齢者のQOLを高めるための活動としての貢献が期待できる。

3. すべての子どもに森のようちえんを体験できる機会が提供できるように、その理念を組織的な活動として広げる。森のようちえん全国ネットワークが中心となって啓蒙活動に取り組むとともに、森のようちえんの実践について、関連する団体、学会や研究会で、科学的根拠に基づいたアピールを行う。

4. 子育て世代にとって、より身近な、子育て支援に関する情報交換の場、子育てを互いに支えあう場としての役割を担う。さらに、将来にわたって、大人みんなで子どもを見まもり、育てる雰囲気醸成に寄与できる活動を進める。

5. 森のようちえんの質を高める取り組みを行う。森のようちえん全国ネットワークが主催する研修会、交流会を定期的に開催するとともに、森のようちえんの認証基準を策定したうえで、認証制度を導入し、質の向上に努める。

6. 森のようちえんの効果について測定する実践研究に継続して取り組み、その結果に基づいて、より効果的な活動に高めていくための工夫に努める。さらに、国内外の研究結果に基づいた、新しい取り組みへの挑戦を進める。

謝 辞

森のようちえん全国実態調査にご協力いただいた施設の皆さまに厚く御礼申し上げます。なお、本研究は、平成26年度および平成27年度に、森のようちえん全国ネットワークが、公益社団法人国土緑化推進機構から委託を受けた事業「森のようちえん」等の社会化に向けた調査等」の一環として行われたものである。

参考文献

- 1) Miklitz, I. (2007). Der Waldkindergarten : Dimensionen eines pädagogischen Ansatzes, (3.Aufl.). Scriptor Verlag, GERMANY.
- 2) 木戸啓絵. (2010). 現代の幼児教育から見たドイツの森の幼稚園. 青山学院大学教育人間科学部紀要, 1, 69-85.
- 3) 森のようちえん全国ネットワーク. <http://morinoyouchien.org/charter/> (2015年10月28日アクセス).
- 4) 樋口耕一. (2014). 社会調査のための計量テキスト

分析 内容分析の継承と発展を目指して，京都，ナカニシヤ出版.

5) 杉山浩之. (2013). 「森のようちえん」の理念と研究課題. 広島文教女子大学紀要, 48, 13 - 27.

6) ペーター・ヘフナー, 佐藤竺訳. (2009). ドイツの

自然・森の幼稚園—就学前教育における正規の幼稚園の代替物. 東京, 公人社.

7) 小西貴士. (2005). 「森の幼稚園」の実践から幼児の発達を考える. 小児科臨床, 58 (4), 581 - 588.